

2023年7月9日 青戸教会 説教『泣かなくてもよい』

高橋克樹牧師

聖書 エレミヤ書38章1〜13節、ルカ福音書7章11〜17節

イエス一行がナインという町の門に来た時、ちょうど、ある母親の一人息子の棺が運び出されるところに遭遇しました。その母親がやもめであったので、町の人々が大勢付き添って、母親の悲しみに寄り添っていたのです。そこで、イエスはその母親を憐れに思っ「もう泣かなくともよい」と言っ、棺に手を触れると、今度は、死んだ息子に向かって「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言っ、死んでいた息子は起き上がって何か話し始めたので、イエスはその息子を母親に返したのです。これを目撃していた人々は『皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた』』と言っ、この出来事がユダヤの全土と周りの地方に広まったことが記されています。

ここで、このような死人の蘇りが起こったきっかけは、イエスが『憐れに思』(13節)った事が発端になっています。憐れに思っという言葉はスプランクニゾマイという言葉で、善きサマリヤ人の譬えでは『憐れに思』(10章33節)と訳されていますし、放蕩息子の譬えでは父親が『憐れに思』(15章20節)と訳されているものです。もともとの意味は内臓がよじれるような痛みを表す言葉で、スプランクノン(はらわた)から来た言葉です。このように、他人の痛みを自分の内臓の痛みのように感じたイエスの思いが蘇らせる発端になっているのです。ギリシャ語原文によると、このやもめの母親はずっつとやもめであったです。そのうえ、今また一人息子を喪失するという、言葉には表せないような深い悲しみの中にあつたのです。その母親を見てイエスは「憐れに思っ」のです。

1

『一人息子』と訳されているモノゲノースという言葉は「かけがえない」と言う意味の言葉で、神の独り子イエス・キリストを連想させます。いずれにしても、イエスは母親にとっかけがえない存在であつた息子に『起きなさい』(14節)と言っ蘇らせたのです。

ここでは死人を生き返らせる力を持つイエスのことが強調されているというよりは、かけがえない存在を喪失して悲しみの淵にいる母親に対する「深い憐れみの思い」があふれています。この「憐れみの思い」が神から注がれたことで一人息子が蘇つたということを、この出来事を目撃した人々は感じたので、16節にあるように『人々は皆恐れを抱き、神を賛美し』たのです。イエスのことを賛美したのではなくて、蘇りを神の御業と理解したから神を賛美したのでしょう。

このように、本日の聖書箇所である「やもめの息子を生き返らせる」物語では、イエス個人の癒しの力が強調されているよりは、イエスの背後にいて、『憐れに思っ』神の存在が前面に出てきているのです。この後に登場する「善いサマリヤ人」の譬えや放蕩息子の譬えでも、人に憐れに思っ心を生まれさせる神の存在が暗示されています。

最近、私の大学院での恩師であつた平山正美先生の記念誌を出すとのことで、私も執筆を依頼されたのですが、その短い思っ出の文章を読み上げてみたいと思っます。

「平山正美先生と初めてお会っしたのは、まだ日本聖書神学校の神学生だつた1988年の特別講義「精神医学特講」だつたと記憶しています。その後、牧師になった後に、牧師の仕事に役立っつと考へて、東洋英和大学大学院で3年ほど科目履修生として死生学の科目を履修した後、正

式に入学したのが2001年9月でした。当時、教会での牧師の働きに加えて、神学校での仕事も抱えていたため、修士課程を修了できたのは2005年9月と、4年間もかかってしまいました。在学中に「臨床死生学事典」のいくつかのキリスト教関連の項目の執筆を依頼され、先生が聖学院大学に移られてからも、いくつかの執筆を依頼されて書きました。

特に平山先生が自死問題に取り組みきっかけの話をする際、ご自分が大学生の時に友人が「自分のような人間の助けをしてほしい」という遺書を自死後に受け取った話をよくされています。私も神学校に入学する前に妻を自死で亡くしていたため、先生が自死問題に取り組まれる動機を感慨深く聞いたものです。『信徒の友』誌上で、「死生学を通して考える復活の希望」というタイトルで対談したのも懐かしい思い出です。

特に記憶していることは、当時牧師をしていた豊島岡教会の会員で薬物依存症の若い男性の対応に苦慮していたことを先生に愚痴った際に、先生は「誰かが支えなければなりませんよね」と励ましてくれたことです。この言葉をいただいて私は腹を括って彼に関わることができるようになりました。

また、先生が召された後の2015年に私が腹部大動脈瘤の手術後に合併症で生死をさまよった時、夢の中に現れて、「こっちに来るな」と言われたことも私にとっては鮮明な思い出です。これは私の中の潜在意識がさせたものかもしれませんが、その後も私が悩みの中にあると、夢に平山先生が現れて、語りかけられた内容は覚えていないのですが、なぜか励まされた記憶だけが目覚めた後に残っているのです。今も不思議な勇気をいただいて、平山先生に導かれてある自分がいるのです。こういう内容です。

平山先生は大学生の時には既に信仰を持っていて、医学生の時に遺書をもらった友人の思いに応えるかたちで精神医学を専攻することになり、自死防止の働きである「いのちの電話」のボランティアの講習者としても働き、日本で年間の自死者が3万人を超えたときには、内閣府に設置された自殺対策推進室にも深くかかわり、一方で精神障害者が就労する場所を作ろうと奔走したり、精神障害者の家族会を立ち上げたりしました。これらの活動は今も継続されています。

このような働きを平山先生にさせたのは何かというと、私は先生の個人的な資質もさることながら、神の憐れみの思いが一人の人間に結実したものと思えてならないのです。神がイエスという存在を用いて、神の憐れむ思いを具体的に癒しというかたちで現実生活の中に表したように、私たちキリスト者も何らかの形で、神の憐れみの思いを体現させることができると思うのです。そのように、神は私たち信仰者にご自分の「憐れみの思い」を与えることで、この世に神の国を建てようとされているのです。

善いサマリア人の譬えに登場するサマリア人も、放蕩息子を無条件で受け入れる父親も、当時の常識では馬鹿な選択をした人間です。でも、彼らは神の憐れみの思いを体現した人物です。人間に常識を超えた選択を神の憐れみの思いがさせるとするならば、その馬鹿な選択に神の憐れみの思いが隠されているのかもしれませんが。人間的に賢い選択が実は神の憐れみの思いから遠いのもかもしれないことを忘れないようにしたいものです。「泣かなくてもよい」という言葉には、神の憐れみの内臓をえぐるような愛の秦らが隠れているのです。